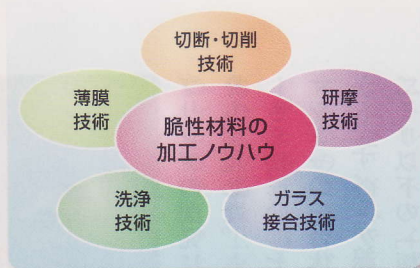




田中社長は「四年前の自社製品以来、当社のIRカットフィルターの品質はナンバーワンの評価が市場で定着している。そうした評価を背景に各方面から製品開発の提案が当社に持ち込まれるようになっていきます。今後、コーティング技術をベリースにコーティング技術を付加し、携帯電話市場でいろいろな光学製品を展開していきたい」と話している。

（取材協力 村越規規税理士事務所／本誌・坂本 茂）



なるため、その分、かなりのコスト削減が可能になるという。

「鍵を握るのはコーティング（薄膜）ですが、半導体メーカーからはすでに好感触を得ています。これがうまくいけば以前のシェアを取り戻すのもけつして難しいことではないと思っています」と田中社長。

一方では、まったく違うタイプの製品も開発している。携帯電話などの画面に指紋や化粧品など油性の汚れがつくのを防ぐ「防汚性ハードコート」がそれだ。

今後のタッチパネル市場の拡大を見込み、コーティング技術を駆使して開発した製品だ。

CASE ④ — ファインパーツ

スプリングの超極小化で付加価値をつける

極小のスプリングをつくらせたら世界でも右に出るものがないファインパーツ。たとえば、半導体製造プロセスで使用されるプローブ（探索針）の構成部品となる「外径六〇ミクロン」という極小スプリングをつくっているが、これほどの精緻な製品を量産できるのは同社だけ。実際、これを肉眼で見ると、髪の毛か糸くずの切れ端のようにはしか見えませんが、顕微鏡でのごく、均等にコイル状に巻き上がった見事なスプリング形状を観察できる。

現在、ファインパーツが手がけているスプリングは、主に、この半導体製造プロセス用プローブと一九九六年から手がけている水性ボールペンの先、そして携帯電話や精密機器のバッテリー接点用のコネクタに使用されるものの三種類。



携帯電話などのバッテリーコネクタ用スプリング（左）



100台のコイルングマシンを持つ

ボールペンの先を支える極小スプリングの分野で独自製法を開発したのは一九九六年のこと。先端の極小のボールをスムーズかつ縦横に回すため筆圧を一定に保ち、しかも液だる技術力が評価されたのである。当時すでに、約五〇台（現在一〇〇台）の高性能コイルングマシンを持ち、経験豊かな職人も数多く抱えるようになっていたファインパーツ。他社の追随を許さず一時は九〇％という圧倒的な世界シェアを誇った。

「しかし、中国の生産技術の向上はもちろん、コスト的な面からコイル状のスプリングから、板バネを使用する機種が増えたこともあって、当社への需要はその後減少していきまし

た」（佐藤令悦取締役営業部長）

そんななか、いまだ、この分野で世界シェア四〇％程度を維持しているのは立派といえよう。ただ、ご多分に漏れず、中国との価格競争に巻き込まれ気味で、思うような利益が取れなくなりつつあるのも確か。

どうすれば利益率を高く保てるのか。そんな「製造業永遠の課題」を解決するために、同社が取り組んだのが、とくに半導体製造プロセスで要求されつつあった、「より小さなスプリングをつくり、かつ量産でき

会社概要

株式会社 ファインパーツ

- 業 種 金属スプリング製造
- 代表者 黒田義光
- 設 立 1987(昭和62)年11月
- 所在地 神奈川県横浜市神奈川区西寺尾2-17-5
- TEL 045-423-6400
- 売上高 4億4000万円
- 社員数 25名
- URL http://www.fineparts.co.jp/

リング分野で
逆に極小ス
プリングの
市場は捨て、
やの薄いたい
合が多く利ざ
要するに、競
いう徹底ぶり
要するに、競

リングの開発にも成功し、量産化
をも実現した。
さらに二〇〇七年にはコイリング
マシン一〇〇台体制を実現する。し
かも、すべてが線径(線の太さ)〇・
二ミリ以下の「極小」に特化すると
いう徹底ぶり。



佐藤令悦取締役営業部長(左)と伊澤博取締役工場長

る」能力を磨くことだった。

というわけで、以後は、極小ス
プリング需要をすくい上げ、外径八〇
ミクロン、七〇ミクロンとより外径
の小さい製品の開発に突き進む。そ
して、前述のような外径六〇ミクロ
ンという女性の髪の毛よりも細いス

は、世界最高の生産能力を揺るぎな
いものにしていったのである。

伊澤博取締役工場長は自社の強み
についてこういう。

「まず、一〇〇台のマシンを使って
大量供給ができること。それから、
他社に比べて納期が圧倒的に早いこ
と。その日の注文をその日に上げる
ことも可能です」

なぜ、即日出荷ができるのかとい
うと、自前のめっき工程を持ってい
るから。めっきを外注すると、二、
三日は余分にかかってしまう。それ
を、自社でやってしまうのであるか
ら早いのは当然である。

さらに、無視できないのが、職人
的なノウハウの蓄積だ。極小スプリ
ングはマシンが自動的につくって
くれるわけではない。まず、材料を
手加工し、マシンに取り付け、調整
を行った上で動かすプロセスには、
様々なノウハウが詰め込まれている
もつといえ、マシン自体にも、ベ
ースとなる装置に詳細なカスタマイ
ズが施され、いわば「ファインパー
ツ仕様」となっているのである。
世界同時不況のなか、佐藤取締役
は「より特徴を出し、利幅の大きい
製品をラインアップしていく努力を
続けること。我々中小メーカーが生
き残るにはそれしかないと思います」
という。

(本誌・高根文隆)

懸念されるケータイ市場の「山寨化」

現在、世界に出回っている携帯電
話は約一二億台といわれている。し
かし、これはあくまで有名メーカ
の「正規品」をカウントしたもの。
実は、膨張を続ける中国市場では山
賊ケータイ、あるいは「山寨機」(山
寨とは山賊や盗賊が築いた砦のこと
と呼ばれる非正規品が大量に出回っ
ているのだ。

中国に工場を持つ携帯電話部品メ
ーカークの社長は「少なくとも見積もって
も携帯電話の総数全体の五%程度は、
すでに中国の非正規品となっている
のではないか」と見る。

中国における携帯電話契約数は、
二〇〇八年末で六億件超で一年で一
億件増えた。も
のすごい数であ
る。ここにハー
ドをより安く供
給すれば、飛ぶ
ように売れるこ
と間違いなし。
もちろん、欧米
や韓国、日本の
メーカーも中国
市場開拓にしのぎを削っている。

前出の社長はいう。
「昨年深センに行った際、全体が山
寨機売り場となっていた。価格は有名ブ
ランド品の一〇分の一近いものもあ
る。外観は正規品と変わりがありません。
機能も、正規品にはない二つ
のSIMカード(電話番号を特定す



中国のネットモールでは「山寨機」が大量に売られている

るための固有のID番号が記録され
たICカード)が使える機能がつい
ている機種もあると聞きます」
台湾のメーカーが発売している携
帯電話用電子基板を使い、少なくと
も外見的・機能的には正規品とそ
う違いがないものに仕上がっていると
いう。

「二気に駆逐される」との声も

いずれにしろ、中国ケータイ市場
の「山寨化」はもはや止まるところ
を知らない。ただ一方で、今後を疑
問視する向きもあるのも確か。

ある大手シンクタンクの研究員は
「所詮、町工場で勝手につくった」な
んちゃって携帯で、
安いものだとい
三〇〇〇円くらいで買
える。部品の精度も悪
く、一年くらいで壊れ
てしまうものも多
聞きます。また、近
中国政府が、山寨機を
ネットワークにつな
がないようにするな
という話も出てい
億台くらいが一
という。

ただ、そのような楽観的な見込み
に反して、世界のケータイ市場が
「山寨化」するようになれば、
当然のことながら、日本の中小部品
メーカーの出る幕はなくなる。
しばらくは注視が必要だろう。